

平成30年度 第3回 大阪府立豊中高等学校 学校運営協議会

日時 平成31年2月15日（金）18:00～19:30

出席者 協議会委員 山崎 彰 西澤 信善 宮坂 政宏 中本 義隆
校長 平野 裕一
事務局 藤井 秀雄、高山 泰司、上林 卓也、朝倉 淳

次第

1. 挨拶 平野 裕一 校長
2. 会長挨拶 山崎会長
3. 協議・報告

(1) 平成30年度 学校教育自己診断結果について

教頭より、結果及び実施された項目について説明。

(委員)

評価結果自体はよい結果が出ていると思う。なお、特に保護者と教員、保護者と生徒の比較で、保護者がどの程度理解しているかということ差し引かなければならないと思う。

ただ単に数値の結果がよいだけでなく、数値がなぜよいのか、数値がいいのは指導方法がよいからであるとか、ある面が改善されたとか、教員側が意識しなくても実は生徒にフィットしている指導であるとか、このようなことを分析しなければならない。そしてこれらを日々の指導にフィードバックし、生かしていかなければならない。

高い数値に対して逆に残りの悪い数値をどういったところに課題があるかを分析することが大切である。

また、生徒の自己教育力をいかに伸ばすか、こういった指標が大切である。

学力だけでなく、自己教育力、自尊感情こういった項目を押し上げるような相関をとり、今後の課題として分析していけば、緻密でいい指導方法、内容を開発できるのではないかと期待する。

(委員)

すべて分析することは困難であると思うが、学校経営計画の中で重点的に生徒に絶対こういった力をつけさせたいことの項目に絞って分析することが大事である。

高い数値結果については、ほぼできているので問題視する必要はないのではないか。

優位に上がったのか下がったのかを統計上のエビデンスを分析するべき。

ただ、いじめの問題は文化祭などと違って、一人でも困っている生徒がいれば大問題である。

全体の数値でなく、切り口が必要なデータであるので、課題によっては考えて分析しなければならない。

(委員)

いじめ問題とか災害に対する知識は100%でないといけない。

生徒間ギャップの分析も必要と考える。

(会長)

高校になると発達に特性のある生徒へのいじめがおきる場合、小中学校では勉強ができていればあ

まり問題化されず、見逃されてきたが、高校生活でコミュニケーション能力により疎外されるケースがあるので、担任の先生等はよく見て支え理解してあげないと、自己否定につながり、自殺に至る場合もあるので、気を付けてもらいたい。

(委員)

生徒に仲間内では許されることも、社会に出れば社会の一員であることを意識し、社会的規範、ルールを社会の中の自分のあり方、いかにコミュニケーション能力を高めさせていくことが大切となっている。

(2) 平成30年度 学校経営計画及び学校評価について

(3) 平成31年度 学校経営計画について

校長より、(2) (3) について続けて説明。

(委員)

「グローバルリーダー」や「国際舞台で活躍」という言葉がよく出ているが、ちょっと抽象的に思え、どういうものをイメージしたらよいか。

(校長)

外国の方が日本を訪れたり、外国に行ったりとあるいは労働力としても入っていく。よく議論されるのが、自国があり、対外的なインターナショナルと、これと違い中心がなく地球全体のグローバルがあるのだが、日本人として地球全体として捉えているような世界地域に住む人々とコミュニケーションを取る機会が増えるということであり、場所的ではないものということである。

(委員)

例えば、具体的に国際的に活躍することと、リーダーとして活躍することはちょっと違うということはある。

リーダーとして活躍する職業とはいったい何なのか。イメージしたらよいか。

例えば、海外でビジネスとして活躍する人たちは英語が必須となっているが、学術面で秀でた研究で貢献するのか、或いはJICAのようなところで国際貢献するなどかなり幅広い概念と思うので、イメージしにくい面がある。

豊中高校では異文化であるイスラムを研究しているが、これをフォーカスすることは非常に画期的である。

(校長)

SGHの研究を始めた頃は、どれだけ日本と違うかから入っていったが、研究や実際に交流をしているうちに、手法の違いはあれど共通点があることを理解してきたようで、研究している生徒は親しみがあるとか共通点を見出している。

リーダーとは先駆的に異文化をどんどん吸収することだとすればちょっとイメージが湧いてくる。

世界で必要なことで、来年4月から外国人労働力を日本は緩和していくが、異文化とどう接していくかが、リーダーに求められているものと思う。

(委員)

学校経営計画の【2】の中期的目標の【1】進路を切り拓く学力の育成で、生徒に付けさせる目的は自己教育力である。

生徒が付けるべき自己教育力とは、学習技能・スキルを持つ、基本的な知識を持つ、或いは自分自身を統制していく能力である。また、2の国際舞台で活躍する人材の(1)の「志」の育成では、自

ら成長していく或いは発達していく志、思考性、自尊感情、自己抗力感、学ぶことによって得られる自信とかプライドなどによって構成されているので、どう付けていくが大事である。

また、これからは情報の発信者、受け手としてどうなのかについても盛り込めてもいいのではないかと。

(会長)

キャリア教育とは何かを考えると、どうしても目の前の大学とか職業というものになるが、もっと広く言えば自分の人生をどう生きるかとか、生き方の問題となる。自分で目標の絵を描かないとそのため何をやらないといけないかをわからなくなる。

(校長)

学校としてはいただいた意見を踏まえ文言をもう一度精査し、トータルで豊中高校の教育とは生徒自分でコントロールしながら先に進んでいけるそんな力をつけるためにこのようなことを実施していることとする。また、これにより人生を切り拓くことにつながっていくと思う。

(会長)

そのためには教員の本当の意味でのサポートが不可欠である。

(校長)

計画の文言は私に任せてもらうことで、その意見を反映した形で計画を承認してもらうことでよしいか。

(各委員)

平成 31 年度学校経営計画と及び学校評価（案）を承認する。

(4) SSH・SGHの後継事業について

校長より上記について説明。

(委員)

文部科学省の枠組みを活用しつつ、豊中高校生徒らしい研究をやっていくことが大切である。

(5) 1年間のまとめ、提言

各委員から一言

(委員)

教育について委員として私の方もいろいろと勉強させていただいた。

(委員)

自己教育力を申し上げたが、例えばOECDで2040年の世界で活躍できる人間をどう育てていくのか、エージェンシーとあって、自立できる自己教育力のある生徒を今後も育てていただきたい。

また、アンケート結果にあったクーラー暖房など学校施設設備の充実をやってもらいたい。

(委員)

教育のことに関しては頭が痛くなり、どういったものが理想の教育なのか考えたら、私はやはり悩むのです。

とにかく無から有は生じないということで、生徒はいろんなことを学んでほしい。学んだことが後で効いてくることもある。

(会長)

私はずっと脳科学、行動経済学的なものをやってきたが、社会経済学に興味が出てきた。

昔オウムの問題があったが、しっかり勉学に励んできた者が社会に出たときに自分がどうアイデンティティを持って生かしていくのかことを考えることが大事と考える。

生徒には社会の一員という意識を持ってもらいたい。

(6) 平成31年度 学校運営協議会について

委員の任期は2年となっているので、来年度も委員となる。ただし、PTA会長は現職の方になるので、来年は変更となる。